様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２４８４

研究課題名（和文）懐疑的解釈を超えてー現代英国における読みの実践ー

研究課題名（英文）Beyond Hermeneutics of Suspicion: Everyday Reading Practices in England

研究代表者
井川　ちとせ（Ikawa, Chitose）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：２０４０１６７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、精神分析学とマルクス主義哲学の影響のもと、英文学研究において広く実践されてきた分析方法を批判的に再検討するものである。「懐疑的解釈」と呼ばれるこの方法は、文学テクストには表面的な意味の背後に隠れた意味が潜在し、解釈者=研究者の仕事とは、テクスト自身が抑圧する真の意味を回復し、テクストを書き換えることにあるという考え方にもとづいているが、本研究の成果は、このような批評に対する理論的アプローチと、英国の一般読者を対象とした実証的調査とを統合した点にある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、「素養ある読者」という理論的構築物を前提とした従来の「読者反応論」とは異なり、これまで学術調査の対象とされてこなかったNPOなどの協力を得ながら、読書会や文学フェスティバルへの参加、読み物雑誌や書評サイトなどの購読や閲覧とそれらへの投稿、さらに読み聞かせボランティアや創作コースへの参加までを広義の読書経験と捉えて、一般読者にとっての読むことの意味を多面的に捉えた点にある。

研究成果の概要（英文）：This research project has critically reexamined the psychoanalytical/Marxist method which has been widely followed in studies of English literature. This method called " hermeneutics of suspicion" is based on the premise that the literary text represses its true meaning awaiting for the interpreter-scholar to diagnose and rewrite what remains unrealized in its surface. This research has successfully integrated the theoretical approach with the empirical research on the everyday reading practices of the general reader in England.

研究分野：英文学

キーワード：英文学　徴候的読み　表層的読み　読書会　解釈共同体

１．研究開始当初の背景

英米および日本の英文学研究は、1970 年代以降、学際的な広がりを見せ、ことに精神分析学とマルクス主義思想にもとづくテクスト解釈を広く実践してきた。文学テクストには表面的な意味の背後に隠れた意味が潜在し、解釈者=研究者の仕事は、テクスト自身が抑圧する真の意味を回復し、テクストを書き換えることにあるという考え方は、Fredric Jameson, *The Political Unconscious* (1981) によって浸透したと言える。

今世紀に入ると、そのような「徴候的読み」あるいは「懐疑的解釈」に対して、相次いで疑義が突きつけられる。合衆国の研究者による重要な単著として、Mary Poovey, *Genres of the Credit Economy: Mediating Value in Eighteenth- and Nineteenth-Century Britain* (U of Chicago P, 2006), Sharon Marcus, *Between Women: Friendship, Desire, and Marriage in Victorian England* (Princeton UP, 2007), Rita Felski, *Uses of Literature* (Blackwell, 2008) がある。Marcus は、テクストの表層に顕在しながら、徴候的読みが皮肉にも看過することを、「ただ単に/正当に読む」方法、"just reading" を提唱・実演し、2 年後には Stephen Best とともにカリフォルニア大学出版の季刊誌 *representations* 2009 年秋の特集号 "The Way We Read Now" を編んでいる。両編者による序論 "Surface Reading: An Introduction" (pp. 1-21) は、テクストを額面通りに読むさまざまな可能性を提示している。Poovey と Felski がともに問題視するのは、テクストを、解釈者による分析と意味づけによって初めて完成する二義的な存在と見なし、文学から情報や娯楽を得ようとする一般読者の「ナイーヴさ」を退けるような、批評家の姿勢である。

英国には、研究者が労働者向けの学外講座や成人教育に積極的に携わってきた歴史があるが、近年は、ミドルブラウ読者に関する実証研究が進行している。2011 年 12 月にシェフィールドハラム大学附属図書館に設置された特別コレクション "Readerships and Literary Cultures 1900-1950" は、学術研究の対象とされることの稀なベストセラーのフィクション作品を収蔵するものである。Erica Brown はこのコレクションをもとに、20 世紀前半の読書経験の再構築を試みると同時に、一般読者をメンバーとする読書会を主宰、メンバーに書評の執筆とブログでの公開を促した（http://reading19001950.wordpress.com）。Mary Grover は同じシェフィールドに "Reading Sheffield" と題したプロジェクトを立ち上げ、1940 年代の「娯楽としての読書」経験に迫るべく、2011 年より聞き取りをおこなってきた（https://www.readingsheffield.co.uk）。活動中の読書会に関する先駆的な調査には、Jenny Hartley, *Reading Groups* (Oxford UP, 2001) がある。

日本では、山田雄三『感情のカルチュラル・スタディーズ』（開文社出版、2005 年）が 1930 年代から 70 年代初頭までの英国におけるカルチュラル・スタディーズを主題とし、その担い手たちが文学を「書かれたことばによるコミュニケーション」と捉えていたことに着目し、教鞭を執る放送大学大阪学習センターの学生に対する聞き取りをおこない、コミュニケーションとしての文学の意義について、貴重な問題提起をおこなっている。

２．研究の目的

本研究の目的は、1) 英文学研究において広く実践されてきた「徴候的読み」あるいは「懐疑的解釈」の問題点を検証しながら、2) 「表層的読み」の可能性を理論的に探求すると同時に、3) 一般読者にとっての読むことの意味を実証的に研究し、4) 英文学の学術研究が、反知性主義に陥ることなく、いかなる社会的役割を果たすことができるかを提示することにある。具体的には、英国における読書会や文学フェスティバル、文学の協会などでの聞き取りおよび参与観察と、一般読者に好んで読まれるフィクション作品のテクスト分析、精神分析批評・マルクス主義批評などの文献の批判的再検討を通じて、新しい読みの可能性を切り開くような理論構築を目指した。

３．研究の方法

研究はおもにつぎの四つの方法で進めた。第一に、三つの NPO 組織の会員や文学フェスティバル参加者を中心とする一般読者への聞き取りおよび読書会などへの参与観察、第二に、上述の組織のウェブサイトや機関誌、書評や読書会関係のウェブサイトや定期刊行物などでの情報収集と分析、第三に読書会で取り上げられたり、読書会の選定とは別にメンバーが愛読書とするフィクション作品の吟味、第四に批評理論の批判的再検討である。

４．研究成果

(1) 「懐疑的解釈」の批判的再検討と「表層的読み」の可能性の探求

拙論「抑圧と解放?―ヴィクトリア朝小説に見る生命、財産、友情、結婚」（井川ちとせ・中山徹編著『個人的なことは政治的なこと―ジェンダーとアイデンティティの力学』、彩流社、2017 年所収）は、ヴィクトリア朝中期の小説 *Woman in White*（1859-60）に描かれた親族関係に注目し、それが抑圧と抵抗という支配的な解釈枠組みに収まらないことを示した。クィア理論の嚆矢とされる Eve K. Sedgiwick, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (1985) は、人類学者である Gayle Rubin の "Traffic in Women: Notes on the 'Political Economy' of Sex" (1975) に依拠しつつ、女を交換可能な象徴的財産として使用する「ホモソーシャル」な社会の定式化をおこなったのであるが、本論では、Rubin が、マルクス主義の階級抑圧の理論を援用して女の抑圧状況を説明することを問題視するいっぽうで、女の客体化を過度に強調していることを、Rubin が引き合いに出した別の人類学者 Marilyn Strathern の *Women in Between: Female Roles in a Male World: Mount Hagen, New Guinea* (1972) を参照することで明らかにした。第二波フェミニズムのうねりが続く 1970 年代前半に、「いずこにあっても女は『客体でしかない』という結論を導こうとして、分析とステレオタイプを混同」するラディカル・フェミニズムの傾向に警鐘を鳴らしながら日の目を見なかった Strathern の *Before and After Gender: Sexual Mythologies of Everyday Life* (Hau Books, 2016) に注目し、本論は、その後約 40 年にわたって、抑圧と抵抗、あるいは封じ込めと撹乱といったナラティヴに回収しようとテクストの余白や行間や裂け目に目を凝らすあまり、テクストの表層に顕在する「明明白白の事実」を往々にして見過ごしてきた英文学批評に対し、Sharon Marcus が提示する「表層的読み」が、とりわけ性科学によってホモエロティシズムが病理化される前のヴィクトリア朝イングランドに関しては有効であることを示した。拙論に加え「はじめに」においては、編者として、学術研究が反知性主義に陥ることなく、いかなる社会的役割を果たし得るか問いかけた。

(2) 一般読者にとっての読むことの意味の実証的研究

英国における現地調査は、イングランド中部と北西部を中心に、2016 年 6 月、11 月、2017 年 5 月、8 月、2018 年 3 月、8 月の計 6 回おこなった。75 名の一般読者への読書実践に関する聞き取り調査を始め、図書館司書 6 名、大学の創作コース講師 2 名、読書会など様々なイベントを開催している個人経営書店の店主らへの聞き取り調査、7 つの読書会、文学フェスティバル（Hot Air Literary Festival、2018 年より The Festival in a Factory に改称）、2 つの大学の市民講座、公立図書館の閉鎖された村における図書貸出ボランティア活動の参与観察もおこなった。また、独自の手法による読書会を英国各地で主催（または共催している）NPO の本部を訪ね、学習部局副部局長と、団体のプログラムの成果の評価を担っている大学教授にインタビューをおこない、後日、この団体本部での読書会の観察もおこなった。うち複数の協力者とはメールや手紙での交流と討議を続けると同時に、年間を通じて、一般読者向けの書評誌やラジオ番組の分析も進めた。

以上の取り組みについては、"From Tokyo to Arnold Bennett's Five Towns: Literary Landscape and Day-to-Day Reading Practices" にまとめ、所属する英国の The Arnold Bennett Society の会報 *Arnold Bennett Newsletter* 2018 年春号に寄稿した (pp. 3-7)。

(3) 理論的分析と実証研究の統合

2017 年の日本ロレンス協会第 48 回大会シンポジウム「情動、共感、D. H. Lawrence とその周辺」における研究発表「文学的経験と『多元的呑気主義』」は、『古典アメリカ文学研究』で用いられた造語 "pollyanalytics"（「多元的呑気主義」は岩崎宗治氏の名訳）に着想を得て、多元主義的社会における他者どうしの共生の可能性を探った。ロレンス作品のなかでは、おもに前掲書と『無意識の幻想』を参照しながら、過去およそ 20 年間の批評の情動的転回と言える動きを紹介しつつ、本研究課題のフィールドワークで得た考察を踏まえ、文学作品が共感にもとづく相互理解を育むことを自明視する近年の潮流を批判的に検討し、いわば「共感という素養ある読者」を想定したアプローチを唯一特権化する危険を指摘した。

中央大学人文学研究所編『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』（中央大学出版部、2018 年）では、序文（武藤浩史氏との共著）と「『ミドルブラウ』ではなく『リアル』―現代英国における文学生産と受容に関する一考察―」（単著）を寄稿した。1990 年代以降のグローバルな出版業界の再編と新たなメディアの登場による文学生産と流通の変化、作者と読者の関係の変容について考察した。侮蔑的な他称であるミドルブラウではなく、「リアル」という肯定的な形容詞でまとめ上げられる現代英国の読者像の実態に迫るべく、一般読者向けのレビュー雑誌や一般読者によるブログ、ミドルブラウに分類されるフィクション群、イングランド中部の読書会の参与観察およびメンバーへの聞き取り調査を分析した。これにより浮かび上がったリアルな読者の特徴は、その雑食性と、自分たちに向けられたプロパガンダを受け流すしなやかさにある。さらに SHARP（Society for History of Authorship, Reading and Publishing）の 2018 年度年次大会では、"Who and Where Are the 'Real Readers'? Everyday Reading Practices in English

Midlands and Northwest” と題し、一般読書向けの雑誌 *New Books* が推薦するフィクション作品と一般読者によるレビューのテクスト分析と聞き取り調査・参与観察とを総合する方法を用いて、「リアル・リーダー」の実像に迫った。2016 年 6 月の第 13 回 The Arnold Bennett Society 年次大会では、“‘And He Wanted My Advice’: Arnold Bennett and T. S. Eliot” と題して、ハイブラウな文学作品をハイブラウな読者が受容し、ミドルブラウ作品をミドルブラウ読者が受容するといった、文学生産と流通、受容の二項対立的なカテゴリー分けの妥当性を検証した。

最終年度はとくに、2018 年 8 月までに実施した個別インタビューの分析に力を注いだ。本研究で得られた、出版文化における複数の行為体の相互作用についての洞察は、2019 年度より開始した科研費基盤研究（C）「実証研究にもとづく受容論の刷新―現代英国における文学テクストの生産・流通・受容―」（19K00389）の着想につながった。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計 3 件）

① Chitose Ikawa, Who and Where Are the “Real Readers”? Everyday Reading Practices in English Midlands and Northwest, SHARP, 2018 年
② 井川ちとせ、文学的経験と多元的呑気主義、日本ロレンス協会、2017 年
③ Chitose Ikawa, “And He Wanted My Advice”: Arnold Bennett and T. S. Eliot, The Arnold Bennett Society, 2016 年

〔図書〕（計 2 件）

① 中央大学人文科学研究所編、井川ちとせ、武藤浩史、近藤直樹、福西由実子、見市雅俊、小川公代、長島 佐恵子、木下誠、加藤めぐみ、松本朗、前協子、渡辺愛子、秦邦生、『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』、中央大学出版部、2018 年、430（pp. 1-26, 399-430）
② 井川ちとせ・中山徹編、藤野寛、鵜飼哲、南裕子、井上間従文、大河内泰樹、中山徹、井川ちとせ、早坂静、越智博美、町田みどり、金井嘉彦、中野知律、小泉順也、『個人的なことと政治的なこと―ジェンダーとアインデンティティの力学』、彩流社、2017 年、342（pp. 3-11, 159-181）

〔その他〕（計 1 件）

① Chitose Ikawa, “From Tokyo to Arnold Bennett’s Five Towns: Literary Landscape and Day-to-Day Reading Practices” *Arnold Bennett Newsletter* Spring 2018、48 (pp. 3-7)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。